

【学会報告】

The 21st IAGG World Congress of Gerontology and Geriatrics (IAGG2017 in San Francisco)

石井 恭正

東海大学医学部分子生命科学・東海大学総合医学研究所

7月23日から27日にかけて、第21回国際老年学会議が米国サンフランシスコにて開催されました。6,052名（うち国外参加者2,753名）が参加した同会議には、日本人300名（カナダ人389名に次ぐ2番目）が参加しました。会長がHeung Bong Cha先生からJohn W. Rowe先生へと引き継がれた本会議では、日本老年医学会前理事長の大内尉義先生と日本基礎老化学会の名誉会員であります韓国のSang Chul Park先生ほか7名の先生方がIAGG Presidential Awardを受賞されました。私は、韓国ソウルで開催された前回会議に続いて参加させて頂きました。



5部門（Biological Sciences, Behavioral and Social Sciences, Health Sciences/ Geriatric Medicine, Social Research, Policy, and Practice, Inter-Disciplinary）で構成されたプログラムでは、基礎医学・老年社会科学・栄養健康科学・ケアマネジメント・老年看護学についてのセッションが開催されていました。基礎医学については、一つの会場で連日、長寿・バイオマーカー・定量的ビッグデータ解析・腸内細菌叢・フレイル・サルコペニア・翻訳後修飾・炎症についての講演がございました。いずれも、老化過程



の分子基盤機構を解明しようとする研究成果が多く、遺伝学が中心であった時代に老化原因を追究しようとしていたものから大きく発展していると感じました。

日本老年医学会総会でもこれと同じような環境（部門ごとによるプログラム区分）でセッションが開催されております。各部門に分かれて開催されるセッション（特にBiological Sciences）は、各学会が開催しているものと何ら変わらない印象を受けているのは私だけではないように思います。老年学・老年医学は幅広い学問分野で、基礎医学研究のキーワードはプログラム区分を超えて多くもちいられています。難しい事とは思いますが、一つのトピックに対して有機的な融合を見いだせるキーワードによるセッション区分が必要であり、各学会や百人規模の会議とは異なる研究者交流が果たせる機会となれば、より有意義な会議になるように思えました。Biological Sciencesセッションへ行くと、他の学会や会議でお会いする面々と変わりなく、特にIAGGでなくても聴講できるような研究成果が多いと感じました。他の部門のキーワードを探り、そのセッションに参加できるのが基礎医学を研究しているものの強みと感じます。



私の場合、今回、「栄養」がキーワードになり、新たな見識を得られる会議となりました。

また、会期中には、IAGG主催のOpening Ceremony/Welcome Reception、Closing Event や GSA

(Gerontological Society of America) 主催の Receptionにも参加させて頂きました。普段は壇上に拝顔する先生方と談笑できるのは、大きな会の醍醐味であり、大いに楽しませて頂きました。



オクラホマ大学 Laurence Rubenstein 先生、ルイジアナ州立大学 Donald K. Ingram 先生夫妻と芝浦工業大学新海正先生・福井浩二先生らと Closing event, cheese and wine party にて。